

2019年冬鳥ウォッチの報告

バードリサーチ 山崎優佑・平野敏明

2019/2020年の冬鳥ウォッチは、元号が平成から令和になって最初の冬鳥ウォッチでした。2019年は9月と10月に大型の台風が上陸し、東北、関東、甲信地方を中心に大きな被害がありました。これらの台風の影響で、現在も入ることができない探鳥地もあります。また、今冬は全国的に暖冬で積雪も少ない冬となりました。このような気象が冬鳥の越冬に影響したのか、関東周辺の公園などで野鳥観察をしていると「今年はアトリを観ていない」という声をよく聞きましたが、全国的にはどうだったのでしょうか。以下に2019/20年冬（以下19年冬）の記録状況について報告します

調査地及び記録状況

19年冬は、北海道から九州までの65名より合計123か所の調査地で各種の合計224件の情報が寄せられました。協力者数と各種の合計は過去最多となりました（図1）。

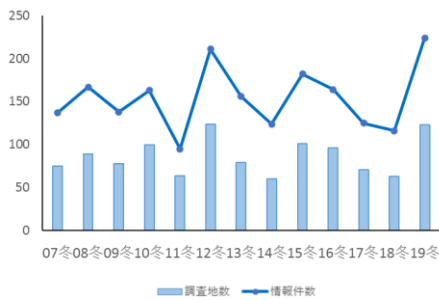


図1. 冬鳥ウォッチの調査地数および情報件数の推移

調査地数を地方別で見ますと、関東が最も多く、全調査地数の約半分を占めています。次いで中部、近畿、九州が多いという結果になりました（図2）。

調査地の環境は、水田や河川、雑木林が含まれている環境が特に多く、湖沼や湿原は少ない傾向があります。（図3）。

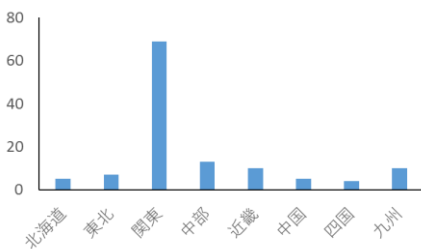


図2. 地域ごとの調査地件数。

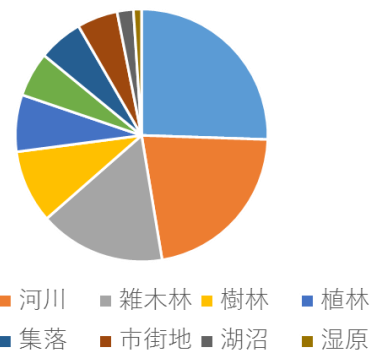


図3. 調査地の環境の割合

19年冬の冬鳥の傾向

種別で最も寄せられた情報が多かったのは、カラヒワの92件で、その次はカシラダカの62件、3番目はマヒワの35件でした（図4）。これら3種で最も多く報告された群れサイズは1~20羽で、過去5年間と比較すると、1~20羽の群れサイズは例年とほぼ同じか、少し多い結果となっています（図5）。

台風の影響でこれまで採餌で利用していた場所の餌の量が減少し、集団でいると餌を獲得できず、分散して行動していたのかもしれませんが。

台風による冬鳥への影響があったという報告もあります。甲信越地方から、昨年はイスカの100羽近い群れが記録されましたが、今年は観なかったと情報を寄せてもらいました。ここはもともと雑木林でしたが、台風によってカラマツ、シラカバの木などが倒れ、一面広々とした原野のようになってしまったそうです。

昨年はアトリの情報件数は全種の中で2番目でしたが、今年は4番目となりました。今年は全体的に情報件数が多い年でしたが、アトリの報告件数は過去5年の中ではワーストで、200羽以上の大きな群れが報告されたのは長野県と新潟県の2ヶ所だけでした。今回の情報件数の約2/3が山か山が近くにある場所からの報告でした。市街地や水田などでも報告はありましたが、群れのサイズは1~20羽の小さな群れがほとんどで、最も大きかった群れサイズも24羽でした。これらのことから、アトリは例年と比較して山地で越冬した個体数が多く、平野部では少なかった可能性があります。

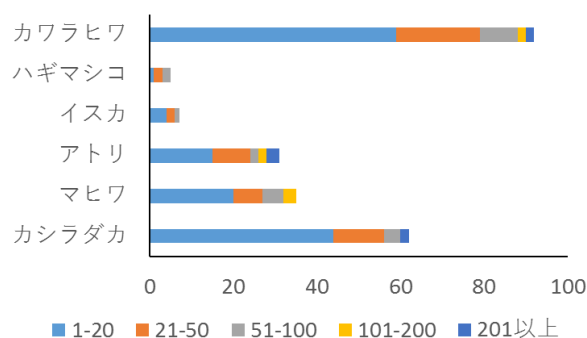


図4. 報告された各種の群れサイズ。横軸は情報の件数。

した。以下に、冬鳥ウォッチでのカシラダカの個体数と情報件数の傾向について取り上げたいと思います。

まず個体数の傾向についてです。結論から言うとまだはっきりとした傾向がつかめていない状態です。というのも同じ場所でも、年によって大きな群れが越冬する場合とそうでない場合があるからです。10年以上継続的に調査が行なわれている場所もありますが、年によって個体数に変動があり、これらのデータだけでは一概には何とも言えないのが現状です(図6)。しかし、10年前までは毎年継続的に調査されていた場所は2ヶ所だけだったのが、現在は6か所にまで増えています。今後毎年継続的に調査を実施する場所が増えることで、傾向が見えてくることが見込まれます。

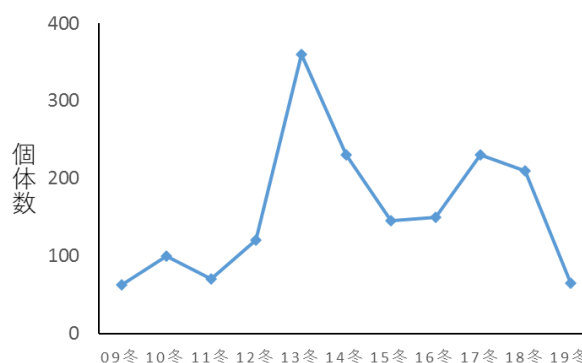


図6. 関東北部の里地の調査地でのカシラダカの個体数の変動

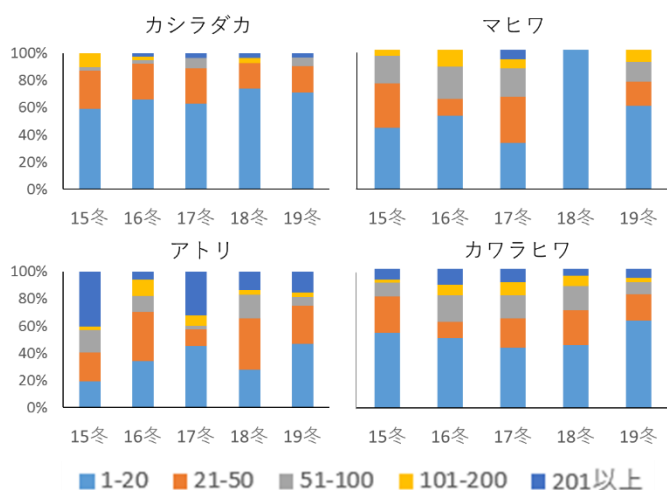


図5. 2015年冬~2019年冬の年ごとの群れサイズの割合。

カシラダカの傾向

2016年にIUCN(国際自然保護連合)のレッドリストの改定で、カシラダカは世界のレッドリストで絶滅危惧VU(絶滅の危険が増大している種)に選定されました。冬鳥ウォッチではずっとカシラダカの群れサイズについて情報収集をしてきま

次にカシラダカの情報件数の傾向についてです。調査件数に対するカシラダカの情報件数(以下、記録率)を調べた結果、19年冬が最も高い数値になりました。また、16年冬と18年冬も5位以内に入っており、比較的近年の方がこれまでより記録されることが多いことがうかがえます(表1)。分布が分散している可能性もありますが、その場合、記録率が高い年は200羽以上の大規模な群れの情報件数が少なくなってもよさそうです。ところが、記録率上位5位のうち07年以外は200羽以上の群れが記録されており、また記録率が低い年で200羽以上の群れが記録されなかった年もあります。そうしたことから、カシラダカの生息状況に関心を持つ方が増えているのではないかと推測します。

カシラダカの調査は容易ではありません。少し近づくとすぐに飛び去ってしまいます。また、ホオ

ジロヤスズメ等姿が似ている種と混ざって採餌を行なうことがあります。こうしたことが正確なカウントを困難にし、年による個体数の変動が見せかけの変動なのか、実際に起きている変動なのか判断を難しくしています。そのため継続的に同じ調査地で観察をして、多くのデータに基づいて解析する必要があります。カワラヒワやアトリのように市街地にはほとんど飛来しないこともあってか、これらの種に比べて情報件数が少ない傾向にあります。しかし、そうした中で、継続的に調査が実施されている場所が増えている事は、カシラダカの傾向を分析する立場としてとても心強く感じます。まだ継続的な調査は実施されていられず、可能な限りでいいので、今回調査された場所で今後も調査を続けて頂ければと思います。「いなかった」という情報も重要です。今後も是非ご協力ください。

表 1. 各年のカシラダカの記録率の順位

年	カシラダカの情報件数 / 調査件数
19冬	50.4
14冬	47.0
16冬	45.9
18冬	45.8
07冬	44.7
08冬	39.5
15冬	38.4
13冬	38.0
09冬	37.6
11冬	34.9
17冬	34.2
06冬	34.1
12冬	31.5
10冬	25.0



最後に

今年の冬鳥ウォッチはこれまでで最も情報件数が多い年となりました。ただ、これまでと同様イスカとハギマシコの情報件数は少なかったです。

イスカは今年、北海道、青森県、山形県、新潟県、

長野県から報告があり、特に北海道と長野県では数十羽の群れが越冬していました。

ハギマシコは北海道、青森県、長野県から情報がありました。北海道と長野県ではそれぞれ2ヶ所から報告があり、樹林や河川、草地、崖等の環境で数十羽の群れが報告されています。

この2種は冬鳥ウォッチだけでなく、バードリサーチのフィールドノートでもあまり記録はされていません。イスカは主にクロマツ、アカマツの林に生息し、マツの実を好んで採餌します。ハギマシコは海岸付近の岩礁地帯などをよく利用します。このようにこの2種は多くの人たちにとって身近とは言い難い環境に生息しているため、観察者が少ないのかもしれませんが、越冬している個体数が少なくなっていて記録されていない可能性もあります。このことを明らかにしていきたいと考えていますので、来年以降もまた是非ご協力頂きますよう宜しくお願い致します。末尾ながら、調査に参加して頂きました皆さまのご芳名を記してお礼に替えさせていただきます。

衣川直美, 井上幹男, 井上賢三郎, 井灘志げ子, 一倉行雄, 稲場実, 猿子正彦, 加藤俊哉, 加藤治男, 加藤美奈子, 花房ゆかり, 吉村明, 久保賢一, 金子凱彦, 金子正, 五十嵐勉, 高橋邦年, 今森達也, 山本貴仁, 四ッ家孝司, 市川進, 鹿間信弘, 柴田絵里, 秋山幸也, 小池順子, 小林俊子, 松村雅行, 松脇菜那子, 上出貴士, 新井清雄, 須田由美, 菅原美奈子, 清水敏弘, 西教生, 齊藤充, 齊藤けい子, 石井智陽, 石田健, 多田英行, 大井智弘, 大出水幹男, 大塚啓子, 中島慶二, 長谷川和正, 長谷部真, 田中正晴, 渡部通, 渡辺美郎, 藤江昌代, 藤波不二雄, 二村一男, 白石ひとみ, 富田恵理子, 武居佳子, 本田孝明, 木村有紀, 鈴木宏介, 鈴木ゆう, 濱伸二郎, 築川堅治, 平田トシ子, 椎名信也, 海老澤秀明の各氏(順不同)。